

展覧会評

「国画会と春陽会」(一) 国画会 (29)

森口多里

梅原龍三郎氏の三点は氏の作として特に優れたものとは云へないものの、(数字不明) がきちんと生かされてゐるのは流石である。今では既に常識的になつてゐるところの太い線や点による単純化も適確で、それだけでも、観る者に快いリズムを与へる。

このピラミッドの頂点から降りると、かういうリズムの快感からも観者は遠ざからなければならぬ。古くからの会員の作品を拾つてみても、河野通勢氏にしる、椿貞雄氏にしる、作者の趣味や感興は、第三者たる観者の一般的肯定を得るほどのものではない。河野氏の場合は特に油絵で描かなければならないほどのものではないし、椿氏の光の興趣は一寸目を惹くけれど極く常識的なものである。山脇信徳氏の《飯台》のモノクロミーの構成は変つてゐるが、これも作者自身の興趣が十分に観者に伝はるものとはいへない。

同じことは山下品蔵氏の八丈島風景に就ても云へる。作者が興奮したほど観者は興奮しないから厄介である。柏木俊一氏の伊豆風景や宮坂勝氏の満洲風物は別に努力の窺へる写生ではない。辻愛造氏の《志摩夏景》や《柳生秋色》は自分の趣味と対象の現実との諧和の効果を於て比較的的成功を得てゐる。土田文雄氏の風景は屈託のない鮮美の色調を求めるのはいいが、

帝展改組の波及で国画会の頭目は梅原氏一人になつたので、展覧会の陳列作品の成績は丁度ピラミッド型をなしてゐるわけである。梅原氏の作品が頂点に居て、それから急角度をなし他の会員や、会友の作品がピラミッドの斜面を構成してゐるのである。

効果は浅い。《秋》における河岸の石の描写など、持て余した観がある。大橋孝吉氏の《流星瀧》の表現のトリビアリズムも手数をかけたほどの効果を齎もたらさなかつた。

今年の展覧会にはフランス派とも呼ぶべき一群が居て、それが会場の単調さを救つてゐる。その中で、久保守氏の作品は今年は表現の効果が一体に弱い。大森啓助氏は《海水浴》の群像描写を試作以上に進めて貰ひたかつた。この作家は描写の臃^{ろう}下^かが逃避にならぬやうに要心しなければならぬ。

この第三室では原創三郎、石川秀太郎の両氏が将来を期待させる。殊に原氏の《雪後》が佳作である。別府貫一郎氏の諸作は輕妙で同時に確實で、殊に《ヴェネツィヤ》や《エセードラの噴水》は優れてゐるが、もつと大きな画境を開拓する意気を出してもよい時期であらう。

青山義雄氏はマチスに師事したと聞いたが、作品は寧ろボナールに近い。その陶酔的な色調には十分に奥行もあつて、本格的な修業の成果を見せて居り、私共をも陶酔させてくれるが、その陶酔の中に一種の物足らなさを感じさせるのは何故であらう。恐らく「生活」を欠くからであらう。その景觀の中に点ぜられてゐる人物や犬が、余りにその現実を去勢されて一片の色塊と化してゐるのも、官能的成果の上ではよいとしても、余りに官能に淫し過ぎたきらひがある。ボナールは私の最も好きな画家の一人であるが、その官能的な画面にはちゃんと「生活」があるのである。

会場にはボナールの影響をもつと露骨に見せてゐる作家が二、三あつた。益田義信氏もその一人である。一般出品者の中には取立てて挙げる程のものがなく、渋川駿二氏の《窓外風景》などは佳作に属する。会友の池辺貞喜氏の《鳳凰山》も素直で伸びやかな表現がよい。佐藤哲三氏の《漁村の

子供》はキャロスキロの効果に工夫が足りなく、その題材にも拘らず、造形的感銘は弱い。

〔朝日新聞〕 昭和十一年四月十七日付

展覧会評

「国画会と春陽会」(二) 国画会／春陽会 (29)

森口多里

国画会では彫刻が一室を占めてゐるが、会員の清水多嘉示、会友の本郷新の両氏が中心となつて、大して佳い作品もない代りに、俗っぽく誇張した作品も見当たらないのが特徴である。清水氏の《処女》は、構想の上でクニドスのデメテル(*1)を思ひ出させて損であるが、纏衣の襷たすに稍近代的な取扱ひを見せてゐる。全体に注意深い工作の痕あとを残してゐるにも拘らず、上半身のポーズに安定の不足を感じさせる。本郷君の《母子》はバランスの興趣に於て成功してゐるが、衣文えもんの取扱ひが如何にもアツパバ(*2)式で粗笨そほんである。総じて日本には衣文に対して神経を使はなさ過ぎる作品が多く、山内壮夫氏の堂々たる《楽徒》などもさうである。本郷君の《生誕》は、アレゴリカル(比喩的)な思想はどうでもよいとして、裸男のポーズに無理があり、嬰兒との対照の効果もびつたりと来ないので全体として何処となく弛緩したものを感ぜさせる。

*1 古代ギリシヤの都市・クニドスの《女神デーメーテル像》

大英博物館所蔵。

*2 アツパバ…寛易服。

一般作品には大したものがなく、宮島久七氏の《腰かけた女》の持つ一種の動勢に心を惹かれる位のものである。試みにその頭部を打毀いて見給へ、きつと効果のいい彫像になるだらうから。

工芸は二部制になつてゐるさうだが、どういふところに差別があるのか、よく分らない。濱田庄司氏の柿釉の陶器において蘭花のやうな文様が時としてうろさく思はれるのは、民芸的無我境に徹しないためであらうか。民芸の味に徹すると知識人の裝飾意識は邪魔になつて、結局孫斗昌氏の《藁籠》のやうなものが面白いといふことになるらしいが、それでは工芸の進歩性が無視されるであらう。いかに民芸の美を唱へたところで、濱田氏や富本憲吉氏の作品はやはり現代の知識人の造形意識の所産であるところに意義があるのである。民窯の中に現代人たる自己を没滅させる必要はないのである。富本氏の《白磁壺》の美も知識人の洗練された造形意識から生れたところに値打ちがあるので、この点では濱田氏の行き方にはどつち就かずの中途半端なところがありはしないか。

* * *

春陽会に移る。

ここは、油絵に関する限り、頭部を取去られたピラミッドの観がある。その頭部は恐らく帝展の方に運び去られたのであらう。

この展覧会では郷土風景全盛で、エクゾーチシズムは国展の方に逃避してしまつたらしい。僅かに水谷清氏あたりが天主堂の景觀にエクゾーチシ

ズムの渴を癒やしてゐるが、その《天主堂側面》の如きは、色彩のための色彩で、その色彩の変化を統一するところのものを欠いてゐる。同君の《猿》や《裸婦とランプ》において、そのボキボキした棒のやうなタッチに作者はどのような効果を予期したのか私には分らない。いづれにしても、同君の画作の興趣には清算すべき夾雑物が多分にあるやうに思ふ。同じやうなタッチは田中善之助氏の《舞妓》其他の画面をも支配してゐるが、物を素直に見るのを邪魔してゐるだけではないか。

横堀角次郎氏の《赤城残雪》その他、國盛義篤氏の《冬の家》その他、今関啓司氏の《山麓浅春》その他等々の郷土風景においては、物象を好んで隴下させてゐる。平板な写実に対する不満のためかもしれないが、その色調に偏つた効果が格別トナリテの美を齎してゐるわけでもなく、ただ現実把握の困難さを逃避する口実に終つてゐはしないか。

お隣のベルナル展でもつと勉強すべきだ。ベルナルなど第三流作家だなどといふ一知半解の考へを捨てて、彼の本格的な修練を積んだ対象把握に省みて、イーゾーゴイングな画面の纏め方や早熟なシャレ気は早く捨てた方がよい。

《朝日新聞》 昭和十一年四月十八日付

展覧会評

「国画会と春陽会」(三) 春陽会 (29)

森口多里

小栗哲郎氏の郷土風景は正直に厚く塗り上げてゐるうちに外気を逃してしまつて、昼でもなく夜でもない景観になつてしまつたものの一例である。厚塗りにかけては、鳥海青児氏の段々畑や水田の描写は、人を驚かすに足るものである。泥や土の物質感を画面一杯に漲らせようとした意欲は面白いし、その正直で執拗な努力には敬意を表するが、顔料の物質感だけがさばつてゐるのでは仕方がない。要するに作者は余りに正直過ぎたのであらう。その未完成の正直さから今に何かいいものが生れるかもしれない。完成した正直さとは、それならどういふものかと聞かれたら、倉田白羊氏の作品を挙げよう。自然の見方が型にはまつてしまつたが、《朝の葡萄園》における光の階調には快いものがある。足立源一郎氏の山嶽描写も正直なもので、深刻がたり神秘がたりしないのがいいが、もう少し複雑な味を汲み出せないものだらうか。山にだつて感情があるんだよと、山嶽から苦情を申込んできはしないか。

中川一政氏の田園描写と木村莊八氏の都会描写とはいいコントラストである。両君共その題材にびつたり呼吸が合つてゐるらしく、画面がその愉

楽を謳つてゐるやうだ。中川君のでは《富士川》がいい。その自由な筆捌きは特有のものである。《山川冬晴》は広い鳥瞰図であるが、各層のプランを一樣に綿密に描いたためか前景が圧倒されてゐる。流れにかかつてゐる橋なども、現実のものでないやうな弱々しさを感じさせる。

木村君の《浅草寺春（東京風景の六）》は縦に細長い画面が主題を生かしてゐる。人工的な色感によつて都会の伝統的な空気を出さうとした意図も肯^{うなず}かれる。顔の単純化の機智もこの意図を助けてゐる。《新宿駅（東京風景の五）》の方は何べん手を加へても依然として画面の散漫さは消えないであらう。これは画面の掴み方が始めから悪かつたのである。この場面で各階級の人間共の烈しい流動を表はさうといふのは、困難である。《浅草寺春（東京風景の六）》の装飾美では追つかないのである。木村君が停車場を^{うなず}持て余してゐるのに対して、石井鶴三氏は《電車》で失敗してゐる。人が吊革にぶらさがつてゐるので初めて電車の中だと気がつくのである。画面の上部などは天窓のやうに見える。《温泉》はいい。感情の溺れない質実な描写で一つの「生活」が表現されてゐる。裸女の肌の色で老若と階級を描き分けたのも効果的である。

以上の郷土風景描写のあとで若山為三氏の諸作を見ると、フランスからつけてきた様式の借着が未だそのままになつてゐるのが目につくであらう。借着は早く返した方がよい。

裸体画では森田勝氏の《臥せる裸婦》が、単調ではあるが素直な描写の

中に一つの特徴を出してゐる。外国風景では田中謹左右氏の諸作が優れてゐる。殊に《トレドの公園》がよい。大きく塗つたタツチも適確であり、色感にも固有のものがある。死なれたのは惜しいことであつた。（*）

（終）

『朝日新聞』 昭和十一年四月十九日付

* 田中謹左右（会友） 昭和十年四月二十五日逝去